

# マックス・ヴェーバーとラスク

—価値と妥当の峻別の意義をめぐって—

## Max Weber and Lask : The Significance of a Distinction between Value and Validity

宇都宮京子

Kyoko UTSUNOMIYA

### 要旨

本論文では、マックス・ヴェーバーの「理解社会学のカテゴリー」（以下、「理解」論文と略す）の冒頭の注で、「より間接的ではあるが」と付記しつつ、「フッサール、ラスクの著作が重要である」と書いている点に注目し、リッケルトの論理学を重視していたヴェーバーが、なぜこれらの2人の研究者の名前に言及したのかを検討した。『マックス・ヴェーバー全集』に収録されているヴェーバーの手紙や、ハイデルベルク大学の大学図書館に所蔵されているラスクの手紙の検討を通して、ヴェーバーとラスクとリッケルト、フッサールとラスクとの関係を検討した。また、ラスクの著作を概観し、彼の論理学が、リッケルトの論理学と距離を少し置いたヴェーバーにとって必要だったのではないかと論じた。

### 1. 問題提起：「理解社会学」とフッサール、ラスク

もう何回も筆者の他の論文でも指摘してきた<sup>(1)</sup> ことであるが、ヴェーバーの論文「理解社会学の若干の範疇」（以下、「理解」論文と略す）の冒頭の注で、彼は、「…また、より間接的にはあるが、フッサールとラスクの著作が重要である」と書いている。この注では、その他、ジンメルやリッケルト、ヤスパース、テンニース、フィーアカント、ラートブルッフ、シュタムラーなどの名前にも言及されているが、「より間接的にはあるが」という前置き付きであろうと、フッサールやラスクの名前をなぜ、ヴェーバーがここで挙げたのかということが、筆者にとっての長年の疑問であった。それは、やはり、ヴェーバー社会学の論理的背景は、リッケルトなどの新カント学派（特に、西南ドイツ学派）との関係が深いとずっと思われてきたからであり、ラスクもヴィンデルバントやリッケルト弟子であり、やはり、新カント学派との関係が深い研究者であるという印象が強かったからである。それにもかかわらず、フッサールの名前が、ラスクの名前と並んで挙げられ

ているのは、なぜなのかという点が気になった。そこで、この疑問を解くために、まず、ヴェーバーとラスクとの関係から見ていきたいと思う。

## 2. ラスクとヴェーバー

すでに『ヴェーバー全集 (Max Weber-Gesamtausgabe Abteilung II)』(以下、M.W.G. II と略す)において、ヴェーバーの書簡の整理がかなり進んでおり、Band5 (1906年～1908年)、Band6 (1909年～1910年)、Band7 (1911年～1912年)、Band8 (1913年～1914年)、Band9 (1915年～1917年)はすでに刊行されている。その中に、ヴェーバーとラスク間の書簡等も収録されており、その数は、かなり多く、その内容を通して、ヴェーバーやその妻マリアンネとラスクが、ハイデルベルクにおいて、かなり親密で深い交流をもっていたこと、ラスクは、新しい著作の原稿を執筆するとそれをすぐにヴェーバーのもとに届けていたことが分かる。また、ハイデルベルク大学の大学図書館の「手書き原稿閲覧室 (Handschriften-lesesaal)」に保管されているラスクの手紙に目を通すと、ヴェーバーが、「ロッシャーとクニース」や「シュタムラー」論文などの新しい論文を書いた時、ラスクは草稿段階でそれを読み、その感想やコメントを寄せていたことが分かる。

### (1) 個人的交流

書簡集に収められている書簡を検討すると、ラスクは、マックス・ヴェーバーだけでなく、その妻マリアンネとも大変親密な交流関係にあったことが分かる。1907年8月8日～17日の間、マリアンネは、ラスクを同伴してポントレジナに滞在し、その9月初めまでシルス・マリアに滞在した。ラスクがマリアンネのために、彼女が満足するような宿泊所を探すために歩き回るであろうことなどを、マリアンネは、ヴェーバー宛の手紙に書いている (M.W.G. II、Band5 : S.348～349)。また、その8月7日～22日の間にヴェーバーがほぼ毎日か1日おきにマリアンネ宛に書いた手紙の末尾には、必ず「ラスクによろしく」という語が記されている (同上、S.349～368)。

その他の手紙の中でも、ラスクは、ヴェーバーとマリアンネが1910年4月に引っ越したツィーゲルホイザー通り17番地の家にしばしば訪れていたことが書かれている<sup>(2)</sup>。この年の4月4日付のマリアンネによるヴェーバー宛の手紙には、新しい家の家具の備えつけとラスクの訪問について報告していると、『ヴェーバー全集』の編者が付けた注には書かれている (M.W.G. II、Band6 S.462)。また、ヴェーバー夫妻は、ラスクの恋愛や女性との交際についても積極的に関わっていたことが、『全集』に収録されている手紙から窺うことができる (M.W.G. II、Band5 : S.347)。

### (2) 学問的交流

1905年9月19日付のラスクからヴェーバーに宛てた手紙には、「ロッシャーとクニース」の出版

前の原稿を送られたラスクのお礼や感想などが書かれている。また、1906年12月31日付でラスクからヴェーバーに送られた手紙には、「シュタムラー論文」（時期から見て原稿だと思われる）を読んだ感想が書かれている。

1910年4月6日に、ヴェーバーがマリアンネに宛てて書いた手紙には、「私はラスクが元気であることを聞いて嬉しい。原稿が出来上がったという知らせは、一体、いつ来るのだろう。彼はいつ印刷を終えるのだろうか」（M.W.G. II, Band6 S.462）とある。編者が付けた注には、この「原稿」とは、ラスクの『哲学の論理学と範疇；論理的形式の支配範囲についての一考察』を指すとメモされている。

1910年4月25日に、ヴェーバーからマリアンネに宛てた手紙には、「……一方、ラスクは私に、予告なしに彼の論文の初めの部分を見せてくれた。その論文は、その中でも序文は、非常に明快に書かれているのだが、まず、ラスクが最近その際に使用する比喩的表現に富んだ言葉使いにおける、『妥当』と『存在』との間の関係が論じられているところが難しい」（M.W.G. II, Band6 S.481）と書かれている。（同じく編者が付けた注には、この論文は、ラスクの『哲学の論理学と範疇；論理的形式の支配範囲についての一考察』であると考えられる、とある。）

### 3. ラスク、リッケルト、フッサール

ヴェーバーが、「ロッシヤーとクニース」の中で、フッサールの『論理学研究』に言及し、参照指示を出していたことについては、筆者すでに、他の論文で何回か指摘してきたが、これは、当時、リッケルトが属する新カント学派の論理的立場とフッサールが提唱していた現象学の論理的立場が対立していたことを顧慮するとき、注意をするべき点であると思われる。なぜなら、当時のヴェーバーは、リッケルトの認識論の影響をかなり受けており、二人の親交も大変深かったからである。

しかし、ラスクは、のちにその師であるリッケルトから微妙な距離をとり始め、1908年に「論理学に実践的理性の優位はあるだろうか」というタイトルで講演を行い、リッケルトの認識論について批判を行った。

その後、ラスクが歩み寄ったのが、フッサールの初期現象学における論理学であった。1910年に刊行された『哲学の論理学と範疇論』の中で、ラスクは、「意味」をめぐるフッサールの基本的な考え方が決定的に影響したことを明記している（Lask, 1910=2014: 37）し、また、この書を、フッサールに献上していたことが、ラスクがフッサールに宛てた手紙を読むと分かる。その手紙の概略は、以下のようなものである。

「私は思い切って、私の小著を同封させて頂きました。最初は、論文として考えられていたも

のが、小さな書籍へと膨らみました。それゆえにこの書籍は、厳密で組織化された性格をまだ備えておりません。特にあなたの『論理学研究』によって現代の論理学の議論へと持ち込まれた問題、すなわち、作用から意義を分離する可能性、純粋な「妥当領域」からすべての混乱している作用シンボルを引き離すことは、私の書籍においては原則として扱われているのではなく、大前提とされているのです。……リッケルトと私がお互いに独立して、この方向転換の実行が迫られていると分かったことは歓迎すべき確認でした<sup>(3)</sup>。多くの点で、私はあなたの見解に反駁せざるを得ませんでした。あなたに対する私の論争点について41・42頁に下線を引きながら指摘させていただきますことをお許してください<sup>(4)</sup>。私は、対象から区別された文の意味や意義等を構成する真理の領域を否定しません——…(中略)……—ただし、まさに、対象と一致する真理が存在するならばですが。……8頁以下の補足として、私は、そこでは——ヴィンデルバントやリッケルトと異なって、価値概念を妥当概念に対して、より低く、終わりから2番目のレベルへと引き下げているのですが——、小さな会議講演<sup>(5)</sup>を同封することを許して頂きたいのです。しかしながら、そこにおいては、規範と価値の関係が取り上げられているのですが、まだ価値自体は、妥当と混乱して取り扱われているのです。あのカテゴリー教説に関する私の論文の主旨に関しては、私は内心、まさにあなたからの若干の賛成を期待しております。……」(ラスクからフッサー宛 1910年12月25日)

#### 4. 向井守の見地について

向井守による『マックス・ウェーバーの科学論——ディルタイからウェーバーへを精神史的考察——』(1997年)は、ウェーバーの科学論をその方法論的著作等を丁寧に検討して書かれた好著であると思われる。向井は、リッケルトとウェーバーの「社会科学の客観性」をめぐる立場の違いについて、以下のように書いている。「リッケルトは社会科学の客観性を普遍妥当な価値に依存させたのに対して、ウェーバーは普遍妥当な価値の存在を否定しながらも、というよりはまさしく否定するがゆえに、社会科学の客観性を説いたのである。では、ウェーバーの客観性とはいかなるものなのか」(向井、1997: 274)。「すなわち客観的な事実判断と主観的な価値判断を論理的に異質なものとして峻別せよという価値自由の主張である」(同上書: 275)。「したがって三つの部分からなるこの文章は、この『客観性論文』の構成自身が示したように、社会科学的認識が、(1)対象に文化意義を付与し、その対象を選択する『価値関係』、(2)選択された対象を加工し整序する『理想型』、(3)事実と価値との区別を要求する『価値自由』という三つの論理的手続きからなり、そしてその客観性は最終的には価値自由にもとづくということを極端に凝縮して述べているのである。いうなれば、この一文章のうちにはカントの『先験的感性論』と『先験的分析論』と『先験的弁証論』とがこめられているのである。……しかしながら、ウェーバーは価値関係、理想型、価値自由とい

うこの三つのものを別々に独立したものとして考えていたわけではない。むしろ、彼は価値自由の思想を価値関係や理想型のうちに浸透させた。彼は、価値理念の主観性にもかかわらず、価値理念を基準にして現実に対して価値判断を下すことと、価値理念を理論的に現実に関係させるという『純論理的で形式的な事態』(S.180)とを厳密に区別した。つまり、価値関係は価値自由を前提として成り立つのである」(同上書：275)。

また、向井は以下のようにも述べている。「しかし他方、『客観性論文』においては社会科学的認識の客観性と普遍妥当性の基準として、価値自由の他にもう一つの基準が見出される。……ヴェーバーはたとえ理想型は主観的で相対的であるにせよ、思惟の規範に拘束されているという形式的論理的整合性のうちに客観性と普遍妥当性の基準を見出している」(同上書：276)。この後、向井は、ヴェーバーが、社会科学は単に問題の思想的連関だけでなく、「観察や因果的解明によって『客観的』に確証されうる事実を確定することによって解決されうる純粋に因果的な問題 (S.271) を研究するものでなければならない」と考えて、その解決策をクリースの学説である「客観的可能性」という「思考実験」の中に見出したと書いている<sup>(6)</sup> (同上書：277)。

筆者は、以上の見解に特に異論を唱えるわけではないが、上述したラスクとリッケルト間の論争を考慮するとき、価値判断と価値関係の間の線引きの可能性について、ヴェーバーは、どのように考えていたのかを改めて考えてみる必要があると考える。カントは、純粋理性と実践理性を分けて考えていたのであり、認識の問題と倫理の問題も別々に検討されていた。それゆえ、カント的な認識論は、自然科学には適しているが、一回限りしか起きないが意義深い出来事も扱う歴史学や、価値を認識し、意味づけをしつつ人々が構成しているこの社会の把握には必ずしも適していなかった。しかし、新カント学派のリッケルトも現象学を唱えたフッサールも、そして、マックス・ヴェーバーもカント的な認識論を全面的に否定していたのではなく、その影響下にいることを自認しつつ、その見地に手を加えて、自分たちのニーズに応じた認識論や科学的方法論を生み出そうとしていたと言えよう。

リッケルトは、文化意義や価値関係という視点を持ち込み、フッサールは、範疇的直観やノエマ・ノエシス概念を論じ、ヴェーバーは、理念型や価値自由、客観的可能性の範疇について論じた。これらの諸見解に共通するポイントは、主観的な視座と客観的事実との関係はどのようなになっており、如何に自分たちの主観的な見地を超えて、客観的事実を把握できるかということだった。

この場合、「価値」は、主観的なものなのだろうか、それとも客観的なものなのだろうか。研究者が、ある文化的社会現象を「意義がある」と思うとき、それが純粋に研究的関心に基づいたものだとしても、研究者が、あることを「研究したい」とか「研究すべきだ」とか思うときには、彼らを取り巻く状況に何らかの問題や解決すべき課題を見出している場合が多いことは、コントやデュルケム、マックス・ヴェーバー、パーソンズなどの例を見ても否定できないと思われる。

## 5. ラスクの論理学と初期フッサール

新カント学派のヴィンデルバントやリッケルトの弟子であったラスクは、「価値」をめぐるこの問題を解決する糸口を、フッサールの現象学、その「意味」の考え方に求めた。

ラスクは、認識における価値と妥当性との関係に関しては、その師たちと距離を取り、また、認識対象の存在をめぐる考え方については、フッサールのことも批判したのである。

### (1) 『哲学の論理学と範疇論』

ラスクは、カントの功績について以下のように書いている。「理論哲学の発展におけるカントの世界史的位置は、彼のコペルニクスの功績に基づいている。……誰もまだ『思いつく』ことのなかった、まったく新しい、これまでに例のないこととはむしろ、超越論的論理学という概念のうちに存在概念を移し入れたことである。……カントにより行われたあらゆる『独断主義』（もっとも狭義の認識論的意味における）真の克服は、この超論理性、論理的なものに対する『超越』を除去したことにある。さらにまた、論理的領野に対する存在の独立性を廃棄したこと、対象と真理内容との古くからの隔絶を破壊したこと、存在の超越論的な論理性あるいは『悟性』性を認識したことに、真の克服がある (Lask, 1910=2014: 12-13)。……対象性、存在、現存、存立ということで、要求を迫る論理的な妥当がわれわれに立ち現われている。『対象』であるということは、主観性に対して妥当し、主観性に『対峙している』真理ということである。……対象が、すでに認識する主観の態度との相関関係における『客観』として措定されていることで、『対象』は超越論的な内容なのである。コペルニクステーゼの意味とは、まさに他ならぬ理論的内容が、実在性、物性、因果的な連関のうちにたしかに介在しているということである」(Lask, 1910=2014: 15)。この文章からは、「対象は、超越論的な内容であること」こそ、ラスクが重視するところのものであったことが分かる。

「今や、客観的『王国』の構造と構成が当面の問題となるのである。客観的な王国は、事実、分節化されている！それは決して、いわば無定形で形式を持たない素材ではない！それは形式を持っている！しかも、妥当なものは、王国における『形式』にあたる。……すなわち、妥当内容がその意味を自ら満たすのではなく、自ら安らうのでもなく、自分だけで『世界』を作るのでもなく、むしろ何かに寄り添うことを必要とし、補完を求めるものとして、かならず自らを超えて、自らの見知らぬ外を指示していることに気付かされるのである。妥当はかならず何ものかに関する妥当、何ものかについての妥当、何ものかに向かう妥当である。……妥当内容とは、『質料』ないし『内実』による充実を待ち受ける純然たる空虚な形式である (Lask, 1910=2014: 16-17)。……形式と質料の融合、形式と質料の接合、それ自体は空虚で補完を必要とする形式が内容面において満たされた状態で生じる全体は、意味<sup>(7)</sup>と呼ばれるべきである。……妥当的内容、たとえば意味全体に特色を与える固有の理論的内容は、徹頭徹尾意味の形式の内にある。質料はたんに、向妥当的内容を通じて当てはめられるものとして、いわば其連れにされているにすぎない、そのため、意味組織全体で

はなく、もっぱら形式のみが妥当的なものとしてみなされて然るべきである（Lask, 1910=2014 : 18-19）。これらの論述からはラスクが、客観的『王国』が分節化されていると考えていたことや形式と質料の融合や接合で生じる全体を「意味」と呼ぶべきであると考えていたことが分かる。

## （２）『判断論』に見るラスクの「価値」論

ラスクの見解では、「判断の意味の正しい構成（Gefüge）も誤った構成も決して判断決定から独立して存在することはない」。なぜなら、判断とは、「肯定すること、否定すること、すなわち、何かを価値的あるいは反価値的と宣言すること」に他ならないのであり、「判断の意味」とは、「然り（Ja）と否（Nicht）とが付いている意味であり、そこにおいて、構成が価値または反価値を備えているものとして現れる形象（Gebilde）」を指すからである（ibid. S.298）。そして、彼は、「そのより複雑な形象から区別されるべきは、それについて決定し、価値と反価値を帰属されることが当然と見なされる構成である」と書き、「この価値あるいは反価値が割り当てられるところの構成は、明らかに判断する態度から独立して存立しなければならない」と述べている（ibid. S.298）。また、ラスクは、主観作用との関係で以下のように書いている。「理論的および美的領域のような価値領域——そこには、内在的ではあるがしかしながら超主観的な、主観的作用から解き放ち得る、対立的に分裂している意味形象がある——と、倫理的領域のような価値領域——そこにおいては、全く同様の対立における分裂が、完全にかつ排他的に主観的態度の責任である——とでは全く異なった説明がなされねばならない」（ibid. S.454）と。

## 6. 結び

以上、ラスクとヴェーバーとの交流は、プライベートな面でも、学問的面でも、非常に深いものであり、お互いに影響を与え合う機会が多々あったことを示した。また、不十分ではあるが、ラスクは、フッサールから、その「意味」の考え方において大きな影響を受けており、それを「価値」との関係にも拡張して、彼の判断論を展開していたことも論じた。ラスクの見地に従えば、理論的価値は主観性とは切り離されているが、倫理的価値は主観性と結びついている。ヴェーバーが歴史的文化科学の概念形成の際には、「価値関係」を用い、しかし、同時に「価値自由」を重視して、科学における「価値評価」を拒絶したことを考えると、リッケルトの価値哲学と袂を分かった後、このフッサールの「意味」の考え方に関連しているラスクにおける「価値」と「判断」との関係についての考え方には賛同するところが大きいのではないと思われる。

### 【注】

- （１）たとえば、「M・ヴェーバーにおける現象学の意義とその影響について——シュッツ、パーソンズのヴェーバー解釈と『客観的可能性の範疇』をめぐる——」『社会学評論』日本社会学会 1991年 81-94頁

- (2) 1911年にマックス・ヴェーバー夫妻は、学期中(5月～7月、11月～2月)の日曜日の昼に自宅を開放し、サロンで“jours”と呼ばれている集まりを行う決心をした。その集まりには、カール・ヤスパーズ、ハンス・グルーレ、ヘルマン・ブラウス、グスタフ・ラートブルッフ、フリードロッヒ・グンドルフ、アルトゥール・ザルツ、エミール・ラスク、エミール・レーダー、ゲオルグ・ルカーチ、エルンスト・ブロッホ等々、多くの知識人が参加した。
- (3) ラスクは、この手紙の中で、ラスク自身とリッケルトとが、お互いに独立して、同じ学的認識に到達したと書いているが、実際は、リッケルトとの間には、問題が起きていた。リッケルトはラスクに、すでに校正稿になっていたラスクの講演の原稿を、ラスクの講演を入手しないうちは、リッケルト自身の論文を印刷しないと述べて、印刷に出さないように懇願していた。しかし、リッケルトは、ラスクより先に自分の論文『認識の二途』を発表してしまったため、ラスクは、「リッケルトが、本質的な観念を彼より先に言ってしまった」ということについて、失望して意見を述べていたと、『全集』の編者は注で書いている。(つまり、ラスクの講演内容と、リッケルトの『認識の二途』の内容は、本質的な点で重なっていたのである。)
- それに対して、リッケルトは、以下のような手紙を、1909年7月7日にラスクに送っている。「私はあなたが、私は本質的なことを私の論文によって、あなたより先に言ってしまったと思っていられしやることをひどく残念に思っております。私はあなたと同一の道筋で推測したところ、多様な価値様式、否定の位置、純粹妥当の価値領域にとって価値対立を見つけることの難しさ等の個所を、わざと注意深く隠してきたのです」。ヴェーバーは、このリッケルトの行いに批判的だったらしく、「私はそれでもラスクは、部分的に主要な見解を先取りされていると信じているのですが、彼はまだ、何か言うべき自分のものを持っているだろうかと好奇心に満ちています」と、1909年7月25日付のリッケルトへの手紙で書いている(S.204)。また、リッケルトが送ってきた『認識の二途』について、「いやしくもどのような権利を持って、……第一の(先験の心理学)の途が歩まれると言い得るのか」などと述べて、厳しく批判している。
- (4) ラスクが、フッサールの見解を批判している個所には、以下のような文章が書かれている。「つまり、個々の対象は個々の理論的意味組織であり、個々の『真理』なのである。というのも、理論的意味の個別性としての真理は、なるほど時間的でない妥当内容の他に、捉えられた非妥当的質料をも含んでいるからである。したがって、率直には次のように言うべきである。空間的-時間的対象は真理であり、物理的対象は物理学的真理であり、天文的対象は天文学的真理であり、心理的対象は心理学的真理である、などなど。……したがって、事物の秩序と連関および真理の秩序と連関に関するいわゆる並行論、つまり関連性は打ち捨てられるべきである。この関連性に従うと、空間と時間を満たす対象と事態の総体には、そうした対象と事態『についての』空間的でもない時間的でもない真理の総体が、前者に付随する真理の影が割り当てられるという仕方、対応することになるからである。対象と真理、対象と『意味』、対象と『意義』について近年見られるこうした分離は、ボルツァーノとフッサールによって、特に際立った仕方では主張されるようになった。……(以下、省略)」(26頁)
- (5) この講演のタイトルは、「論理学における実践理性の優位はあるのか」であり、リッケルトが、1904年にその著書『認識の対象』第2版において「知(Wissen)の基礎は良心(Gewissen)に存する」という「実践理性の優位説(Lehre vom “Primat der praktischen Vernunft”)」を提示したことに応えたものである。ラスクが捉えた「実践理性の優位説」とは、「対象とは、実践の態度の決定である。すなわち、価値概念を言い換えたものである。……もしも真理が価値であるならば、独特な理論的主観の活動、すなわち、認識することは無関心な態度ではあり得ず、むしろ、価値への態度決定、実践的活動であらねばならない。……認識することも、判断において決定を下すことも、真理を得ようと努力することもまた、義務的に、良心に従ってとりおこなう。知の背後には良心があるのである」(S.350)というものであった。この学説に対するラスクによる批判の要点をまとめると次のようになる。「道徳的な意思の対象は、常に価値に満ちた態度であるので、次のように言わねばならない。実践的態度は、純粹な客観的妥当やそれから出てくる『要求(Fordern)』に直接対峙し得ているのではなく、主観的な価値領域というあの立ち寄り先(Zwischenstation)の仲介によって対峙し得ているにすぎない。実践的判断態度についての学説は、今、明らかになったように、その認識概念において、直接的な主観の領域と何か新しいものとして踏み出している人格の領域とを一つに融合するという誤りを犯しているということが、われわれの論争の正当性にとってのもっとも確かな保証である」(S.355)。
- (6) 「客観的可能性」判断の使用とは、「因果性」や「因果帰属」のところで行われるが、元々、法学や法哲学の領域、特に、刑法の領域で、v.クリースやラートブルッフなどが、「適切な因果連関(adäquate Verursachung)」の問題を検討したことと関係している。



なぜ、刑法の領域の方法が、社会学の行為の動機をめぐる問題と関係するのかについては、筆者は、他の論文（注）で検討したので、今回は触れないが、因果帰属の妥当性の問題とは、まさに、思考上、組み立てられた行為の結果とその動機との因果連関が実際に起きた可能性の程度を問うということであり、認識の客観性を問うことに関係している。（注）東洋大学社会学部紀要 第50-2号（2012年度）57-70頁

- （7）判断の構造の理論は、また判断の『意味』（Sinn）の理論と名付けることが出来ること、この意味をめぐる見解は、フッサールによって現代の研究に意識されるようになったことなどが、ラスクの『判断論』の中で書かれている（12頁 S.292）。この『判断論』の原稿も、ラスクは、刊行前にヴェーバーに見せていたことが、『全集』に収録されている書簡から察せられる。

## 【引用・参考文献】

Husserl, Edmund: Logische Untersuchungen, Zweiter Teil, Halle A.S.

Max Niemeyer 1901『論理学研究』2, 3 立原・松井訳 みすず書房 1974年

Lask, Emil: Gesammelte Schriften, Hrsg. von Eugen Herrigel.

J.C.B.Mohr, Tübingen 1923

‘Gibt es einen “Primat der praktischen Vernunft” in der Logik?’ (Kongressvortrag) 1908

Zweiter Band, (S.1-272) ‘Der Logik der Philosophie und die Kategorienlehre’ (1911)

『哲学の論理学とカテゴリー論』大橋容一郎（監修・解説）ラスク研究会（監修）、庄子綾その他（訳）上智大学哲学学科紀要(40) 2014年

Lask, Emil: ‘Die Lehre von Urteil’, 1912

『判断論』久保虎賀寿訳 岩波書店 1929年

向井守 マックス・ウェーバーの科学論——ディルタイからウェーバーへの精神的考察—— ミネルヴァ書房 1997年

Rickert, Heinrich: Der Gegenstand der Erkenntnis, Einführung in die Transzendentalphilosophie, 2 Aufl., Verlag von J.C.B.Mohr (Paul Siebeck), Tübingen 1903

Rickert, Heinrich: Der Gegenstand der Erkenntnis, 62 Aufl., Verlag von J.C.B.Mohr (Paul Siebeck), Tübingen 1928

Treiber, Hubert/Sauerland (Hrsg.) Heidelberg im Schnittpunkt intellektueller Kreis, Westdeutscher Verlag 1995

宇都宮京子：「M・ウェーバーにおける現象学の意義とその影響について——シュッツ、パーソンズのウェーバー解釈と『客観的可能性の範疇』をめぐる——」『社会学評論』日本社会学会 1991年 81-94頁 Vol.42 No.3

宇都宮京子：「リッケルトとウェーバーの関係の再考察」『情況』7月号 21-38頁 情況出版 2000年

宇都宮京子：マックス・ヴェーバーにおける「客観的可能性判断」をめぐる諸考察『東洋大学社会学部紀要』第50-2号 2013年

Weber, Max: Gesammelte Aufsätze zur Wissenschaftslehre, 4. Aufl., J.C.B. Mohr (Paul Siebeck), Tübingen, 1922 所収の論文

- (1) (S.1-145) ‘Loscher und Knies und die logischen Probleme der historischen Nationalökonomie’, (1903-06)『ロッシャーとクニース』(一)(二)松井秀親訳 未来社 1955年 (‘Loscher und Knies und die logischen Probleme der historischen Nationalökonomie’, (1903-06), G.A.z.W., 2. Aufl., 1951, S.1-145)

- (2) (S.146-214) ‘Die “Objektivität” sozialwissenschaftlicher und sozialpolitischer Erkenntnis’, (1904), G.A.z.W., 1922 『社会科学および社会政策の認識の『客観性』』(本文中の略称：「客観性」論文) 出口勇蔵訳 世界の大思想23 49-115頁 河出書房 1963年

- (3) (S.215-290) ‘Kritische Studien auf dem Gebiet der kulturwissenschaftlichen Logik’, (1906)『歴史は科学か』森岡弘通訳 みすず書房 1965年 99-227頁 ((学問論文集を底本としたことは記されているが、第何版のものかは明示されていない。)

- (4) (S.427-474) ‘Über einige Kategorien der verstehenden Soziologie’, (1913)『理解社会学のカテゴリー』(本論文中の略称：「理解」論文) 海老原・中野訳 未来社 1990年 (‘Über einige Kategorien der verstehenden Soziologie’, Logos, Internationale Zeitschrift für Philosophie der Kultur, 4 Band, 3 Heft, J.C.B. Mohr, Tübingen 1913, S.253-293)

Weber, Max Max Weber Gesamtausgabe II Band 5~9, Hg.von M.Reiner Lepsius und Wolfgang J.Mommsen, in

Zusammenarbeit mit Birgit Rudhard und Manfred Schön J.C.B.Mohr(Paul Siebeck) Tübingen (本文中では、M,W,G II と略す) Band5 1990年／Band6 1994年／Band7 1998年／Band8 2003年／Band9 2008年

【Abstract】

## Max Weber and Lask : The Significance of a Distinction between Value and Validity

Kyoko UTSUNOMIYA

In this paper I discuss the reason why at the beginning of his paper, "Ueber einige Kategorien der verstehenden Soziologie," Max Weber wrote a note that Husserl's and Lask's works were important, although more indirectly. I turned my attention to the Weber's note, because I know that Weber had attached great importance to the logic of Rickert. By examining the briefs Weber and Lask, I studied the relationship between Weber, Lask and Rickert, moreover between Husserl and Lask. Weber's Briefs are printed in *Max Weber Gesamtausgabe*. And Lask's briefs are keeping in the university library of Heidelberg university. Furthermore I examined Lask's works and drew a conclusion that Lask's logic was necessary for Weber who noticed the essential differences between his logic and Rickert's one.